大　属　袋野直記（三高　七〇石－二〇石）

権大属

古川策馬（一〇〇石－二二石）　脇田嘉一郎（一五〇石－二〇石）

山名勇記（六〇石－二〇石）　高瀬雪江（五〇石－二〇石）

佐久間　衛（二〇〇石－三二石）　遠城寺評衛（六〇石－二〇石）

谷　萬年（十人扶持－一七石）　梅　豹蔵（一〇人扶持－一七石）

片岡丈助（三人扶持－一七石）　緒方大年（三人扶持－一七石）

少　属

梅田敬止（三人扶持－一三石九斗）　小田部伺作（三人扶持－一三石九斗）

黒木周蔵（三人扶持－一三石九斗）　渡川成人（三人扶持－一三石九斗）

須田益戈（三人扶持－一三石九斗）　山本太郎（三人扶持－一三石九斗）

浅田恭平（三人扶持－一三石九斗）　今川左助（三人扶持－一五石三斗）

安藤平佑（三人扶持－一五石三斗）　黒木貫鐵（三人扶持－一三石九斗）

権少属

小寺藩士（八石三人扶持－一二石三斗）　関　青士（八石三人扶持－一二石三斗）

堺田兵助（〃　一二石三斗）　渡辺吉右エ門（〃　一二石三斗）

佐藤為吉右エ門（〃　一二石三斗）　今井幹之進（〃　一二石三斗）

吉垣久助（〃　一二石三斗）　井澤　半（〃　一二石三斗）

岩崎伝一（〃　一二石三斗）　安永脩一郎（〃　一二石三斗）

片岡祖助（〃　一二石三斗）　関　準平（〃　一二石三斗）

小寺素一（一人扶持－三石九斗）　山口詠造（〃　一二石三斗）

白井峻介（三人扶持－三斗）（兵員以下（つづく）省略）

とあって、あえて旧藩制による従来の役職にこだわることなく、軽輩の中から大いに新しい人材を登用したことがわかって、面白いと思います。

（おわり）

（下段よりつづく）

ちようど船頭所川とか長島川などの呼び方があるように。矢野龍渓の号も、当然汪洋（ひろくひろがるさま）たる龍渓によつたものである。

（以上）

小言

龍渓について

（月柴生）

先月十五日本会主催の最初のサイクリングで立ち寄った長瀬の東方庵について、今月の市報は、写真入りで紹介して下さっている。

ところが、早速二三の方々から「矢野龍渓の碑」について問い合せがあったので、私なりに解釈すればこうである。

東方庵の紹介はいいが、この碑は矢野龍渓の碑ではなく、寺の上方の渓谷を、先年「龍渓」と名付けたそのことがあり、矢野龍渓の号のことにもふれているが、この碑は人物の碑でなく、渓谷の碑である。このことをまずはっきりしておきたい。

旧藩時代、詩人たちから愛称されていた龍渓は、実はこんな狭くるしい所でなくて、番正川が龍護寺付近を流れるあたりで、「龍川」または「龍渓」と呼ばれていた。

先ず中島子玉に「龍川舟遊八首」の長篇が有名。子玉の師広瀬淡窓は、少年の頃幼学の師松下筑陰に随って船でここに遊び、「羽明山下水初メテ波ダチ、龍護寺河畔棹ヲ移シテ過グ……」と詠じ、このあたりやや渓流であったことがわかる。

また秋月橘門に「春雨霽チ晴レテ舟ヲ龍渓ニ浮カブ」という題で、新緑の龍護寺に詣でた七言詩があり、また別に「雛八（旧暦十二月八日）東方庵ヲ訪ト（その後で）龍渓ヲ渡ツテ（龍護寺に）梅ヲ看ル」と題して、

「帰路龍渓ヲ過グ……矮梅未ダ笑ヲ解カズ……」云々の五言詩を、その詩集「橘門韻語」にのこしている。

つまり明らかに、龍渓は長瀬部落のせま苦しい谷間ではなく、船に棹さして遊び楽しめる川である。龍護寺付近の、番正川本流の部分名称が龍川であり、龍渓である。

（上につづく）